

明治初年長崎の居留地外国商人と

邦商との取引關係（一）

重 藤 威 夫

序

多数の国々の外国貿易史の示すところによれば、開国当初における外国貿易は主として居留地の外国貿易商人によつて営まれたのがその起源をなすものと言ひ得る。英國もその外国貿易が本格的な發展を見せはじめた中世末期には、専らロンドン其他の諸開港場に居住するイタリア商人（Lombards）やハンザ同盟の商人（Hansards）達によつて外国貿易が営まれた。開国当初国内の商人は未だ海外の經濟事情に暗く又貿易事務に習熟しなかつた當時としては蓋し止むを得なかつたものであらう。

我國は安政元年（一八五四年）三月三日のペルリ条約によつて開国の国是が定められ、下田、函館の二港を貿易のために開港した。次いで同年八月英國、同年十二月露西亜と通商条約を締結し米国同様の特典を与えた。然るに、安政五年（一八五八年）米・蘭・露・英・仏の五ヶ国と改めて修好通商航海条約を締結し、横浜・長崎・函館・神戸・新潟の五港を開港した。長崎はその当時五大開港場の一として、各国から多数の貿易商人が居留地に定住して種々なる取引に従事した。それらの取引の内容は單に貿易に限らず、金融其他各種の業務を含んでいるが、その具体的な内容について、それらの外国商人と長崎商人との間に惹き起された當時の訴訟事件記録を通じて、明かにせんとするの

が本稿の目的である。

これらは種々なる問題を含んでいる。例えば、そこには西欧の近代的な合理主義精神に基く合理的な且つ嚴正な商取引慣習と、我國商人の封建的な非合理的精神に基く合理性を欠く商取引慣習との相違並にそのために惹起された葛藤が見られる。又彼我の經濟倫理觀の高低を示す具体的なる例など多くの問題を示唆している。遺憾ながら直接的にその当時の貿易の取引内容を示す史料が欠けているために、現存する訴訟記録を通じて追求して行く外はないのである。次に幾分間接的になるのを免れないが、それらの各個の訴訟事件記録を通じて個別的に各種の取引關係を明らかにしてみたい。

アメリカ人經營のケース商会からその使用人である和泉屋徳平が費込んだ取立代金を請求する事件である。一八六八年（明治元年戊辰）四月三十日付を以て、公事方掛重役宛に訴状⁽¹⁾が提出されている。当時この商会は長崎に於いて各藩相手に船艦或は船用品の販売に従事していたように推察される。事件の内容は次の如くである。ケース商会はその使用人と泉屋徳平をして肥後家のコスモポリト船から洋銀一五四枚を取立てさせたのであるが、同人は勘定書を船においたままで、金はまだ受取つて居らぬという。然るに肥後士官衆の方では既に支払つたと主張する。又同人は薩摩藩のホントラス船から洋銀一七八枚三分七厘を受取つた筈であるのに、本人は未だ右の金を受取つていないという。然るにこの勘定もすでに支払済のことがはからずも露見した次第である。同人对し費込金額を弁償するように申入れたが、その後久しい間、同人の姿が見えずおそらく茶屋での遊興に日を過しているのであらうと思われる。この費込金について裁判のお上の力で同人から金を取立ててもらいたいとの訴願である。

これは外国商館手代の費込事件であるが、当時この種の事件は多数あつたであらうと推察される。和泉屋徳平なる者によつて当時の長崎の若い衆の遊蕩気分がよく代表されているように思われる。この事件は同人の父親平戸町居住の恒太郎より官事御役所宛に提出された「乍恐奉願口上書」⁽²⁾に見られるように、父親が本人に代つて弁償すること

になつた。その日附は翌明治二年（己巳）七月十二日附であつて、この口上書はその支払の猶予を嘆願する書類である。更に同趣旨の嘆願書^③が同年の八月二日附を以て提出されている。この事件は解決が永引き、結局、明治三年（庚午）六月十七日に「皆金払済の上事済」となつて解決した。

右のコスモポリート（Cosmopolite）船とホントラス（Huntress）船とは、幕末にそれぞれ肥後藩と薩摩藩とが外国から購入したものである。

幕末に於ける船艦の輸入については勝海舟の調査が最も詳しい。それによれば、安政元年海軍創設から慶長三年幕府倒壊までに、幕府及び諸藩が購入・製造し、又は贈呈された船艦数及びその価額は次の如くである。

政府軍艦 八 艘

同諸船舶 三拾六艘

總計 四拾四艘

此代価三百三拾三万六千弗

但国製諸船及購買代価未詳者除之

諸藩廿九家所有船舶

總計 九拾四艘

此代価四百四十九万四千弗と金八千百兩也

但前同断

右によればこの十四年間に幕府及び諸藩が購入（贈呈を含む）製造した船艦数は合計百三十八艘、其価格七百八十三万弗と金八千百兩余に達し、その中諸外国から購入したものが大部分で、百十艘に及んだ。^④

船艦の購入は主として長崎港で行われ、同港が横浜港よりもその購入高で劣つたのは、僅かに文久二年のみで、他年度にあつては、夫々総輸入額の七割内外を占めていた。かく長崎が船舶の主要輸入港であつた理由は、薩州・土佐・肥前・紀州・加賀・肥後・長門・筑前等船舶の購入に最も力を注いだ諸藩が多くの場合、西南の諸藩であつたこと

と同港の飽之浦には文久元年（一八六一年）に後で造船所として發達した長崎製鉄所が創設されたために船舶の修理其他の便益があつたことにあるのではないかと考えられる。長崎製鉄所は幕府の命によつて、長崎奉行岡部駿河守の監督の下に、蘭人ハルデスを顧問として、主としてハルデスが工事に當つて建設された。⁽⁶⁾長崎製鉄所開設以後の文久二年から慶応三年に至る間が船艦の購入が最も盛んであつた事實を考えるならば、兩者の間に或程度の関連があつたことを推測せしめる。

船艦の最大の供給国は英米で、この兩國に比すれば他の諸国は殆んど問題外であつた。当地の統計史料は建造国名を記しているのであるが、當時は建造国即壳渡国の場合が多かつたようであるから、大体において建造国を供給国と見て差支えないであろう。英国による船艦は合計七十艘、その価額四百五十八万九千五百弗余に達し、隻数においても金額においても、全体の六割内外を示めている。次いで米国による船艦数三十艘、その価額二百三十一万五千五百弗であつて、隻数及び金額において夫々全体の三割内外を占めている。従つて、幕末における船艦の購入は殆んど全部これを英米兩國に依存した。

幕府が最大の船艦購入者であつて、隻数において全体の三分の一を占め、金額においては四割四分を占めている。諸藩にあつては薩・長・土・肥の西南雄藩が、群を抜いて居り、それに紀州・加賀・肥後等の大藩が続いている。殊に、薩藩の購入船艦は十七艘百十二万四千弗余に達し、隻数並に金額において幕府購入高の約三分の一に当り、長・土・肥三藩の合計高に匹敵している。大砲を裝備した軍艦の購入者は幕府だけであつて、諸藩は船舶だけを購入してゐる。

前記のコスモポリート船は、一八六四年（元治元年）に肥後藩が十二万ドルで購入したもので、製造国は仏国である。ホントラス船は一八六五年（慶応元年）に薩州藩が一万ドルで購入したもので、製造国は米国である。繫争の対象となつている洋銀三三三三枚はこれらの船舶の購入代金の一部ではないかと思われる。次に右の二船の内容を左に掲げる。⁽⁶⁾

船名	原名	船形	船質	馬力	幅長	噸數	製造国
万里丸	コスモボライト	蒸気内車	木	一二〇	長四〇間 幅五二間半 深二間半	六〇〇	仏
龍田丸	ハントルス	バルク	木	〇	長十七間半 幅三間半	三八三	米

(1) 私共儀先頃暫之間召使として和泉屋徳平と申者召使ひ罷在此もの先頃肥後家コスモボート船より洋銀百五拾四枚の勘定取立て候同人最初中遣候は右勘定書船に罷置いまた金子請取不申段申聞候得とも肥後士官衆よりにては被相払居候趣被申聞候乍去混雜相生し候よりはと思恵仕右士官衆未た被相払居不申儀と信用仕候折柄再ひ右勘定請取候便宜も可有之と存じ其儘金子損亡と致居候然るに薩摩士官衆之内に附属いたし候ホントラス船の勘定洋銀百七拾八枚三分七厘右屋敷より同人請取居惣而未た請取不申段申聞候然る処同く此勘定も既に払済之儀不計露見いたし候末貴所様方え私共より不願立様同人及歎願右金子同人相償ひ可申段申聞候得共其後久敷同人見請不申多分は茶屋に而暇を費し居候歟に見請候就而は貴所様方え願立候聞此儀御取捌被下右金子御請取被下候は、難有奉存候若又並国岡士之手を経願立候筋に御座候は、左様可仕候得共可相成は同人え不申入御吟味相成候方御勝手と被存候に付此段以書付奉願候以上

六十八年第四月三十日

ケース商會

公事方掛

御重役様

四月八日

今村朔郎 訳

(2)

乍恐奉願候口上書

明治初年長崎の居留地外国商人と邦商との取引關係 (一)

一私忤得平儀異国人引合之儀に付毎々御沙汰に相成奉恐候依て近頃恐多奉存候得共当月中迄之処御猶予被成下候様
奉願候左候ハバ御返答申上候間此段以書面奉願上候

己

平戸町

七月十二日

恒太郎 ㊤

管事

御役所

前書之通奉願候に付奥印仕候以上

乙名

安富亥三郎 ㊤

(3)

乍恐奉願候口上書

一私忤得平儀異国人引合之儀ニ付毎々御沙汰ニ相成候ニ付先月迄之処御猶予奉願候処今以埒明不申候段甚以不都合
之儀奉恐入候依之近頃恐多奉存候得共当月中迄之処日延御猶予被為成下候ハ、身寄之者差遣シ御返答奉申上候間
何卒宜敷奉願候此段以書附奉申上候

己

平戸町

八月二日

恒太郎 ㊤

外国官事御役所

前書之通奉申上候ニ付奥印仕候以上

乙名

安田亥三郎 ㊤

(4) 海舟全集第八卷（海軍歴史）四四三頁以下、造船協会編「日本近世造船史」七九頁、一二〇頁以下、山口和雄、幕末貿易史（昭和十八年）九四―九五頁による。

(5) 三菱長崎造船所史九頁

(6) 山口和雄、前掲書、一〇八―一一八頁

二

訴訟事件の多くは外国商人から貸金或は売上代金の不払等について邦商を訴えたものが多く、逆の場合は例外的に少い。ここに取上げた事件は邦商から英国商人を売上石炭代金の一部不払について訴えたものであつて、例外的な事件である。一八六九年（明治二年）十月中長崎において、邦商国太郎と称する者から英国商人コキン（Cooking）え石炭を四、四七八桶売渡した。その石炭は英国のバルク船ゼードー号に積込まれ、その船は函館に廻航され、そこで長崎で積込んだ石炭を全部売却した。

繫争の要点は、売買された石炭の桶数（四、四七八桶）については争論の余地はないが、総斤数について原告に主張の相違があることである。売主である邦商の主張では、四、四七八桶の総斤数は五六〇、八六九斤に上る。然るに買主であるコキン商会及びゼードー号の船長の申立は、右の船積した石炭は二六九屯即四五一、九二〇斤であるとする。コキン商会の方では四五一、九二〇斤について代金を支払つたわけであるが、国太郎の方では五六〇、八六九斤に対する代金を請求した。即、両者の差額一〇八、九四九斤の代金として一九一両の追加支払を請求したわけである。当時は斤数単位で売買されていた。（5）

当時外国人は治外法権の下にあつたから、この事件は翌一八七〇年（明治三年）五月に長崎の英国岡士館（領事館）に持込まれた。これらの関係は当時の直接取引の文書が現存していないために、英国岡士（領事）エンネスリーから長崎の野村知果事宛に提出された「裁断書写」（英文（1）並に訳文（2））と同じく手紙（英文（3）並に訳文（4））によつて知り得るだけである。

右の手紙によれば、邦商の斤数の計算の仕方は甚だ不正確であつて信頼できないと主張する。コキンが国太郎に対して斤数計算の方法を質問したところ、国太郎は四、四七八桶中から八桶を抜き出して斤数を計り、その八桶の平均斤数を以て全体の斤数となしたと答えた。かかる方法は通例の計算法でなく、甚だ不慥な方法である。しかも売主は毎日船積される石炭の斤数を記録する勞をとらなかつた。この手数を怠らねば正確な斤数が計算できた筈である。しかも原告が証拠となすのは四、四七八桶の受取書だけであつて、何等信頼するに足るものがない。これに対して被告の方では、横浜の英国岡士の前にゼードー船の船将 (Master) 及び士官 (Chief officer) が提出した申開書 (Declaration) 並に同じく英国岡士に提出した函館での売却石炭二六九噸の「売却勘定書」を証拠としているのであつて、原告の証拠は「相立兼」と主張する。この事件は、横浜岡士館では裁断書の写の通り、原告の主張が通らず、被告の勝に歸した。おそらく原告は横浜で敗れたので、事件を長崎領事館に持込んだのであろうが、左の長崎英国領事から野村知事宛の手紙に見られる通り、前同様被告の勝となつたようである。

これは西欧の近代的な合理的商業計算の方法と未だ封建的氣風を完全に脱却し得なかつた日本商人の前資本主義的非合理的な計算方法の対立であると考えられ得るであらう。おそらく当時はこの種の事件が頻發したに相違ないが、この事件はその典型的な例として深い意味を藏するものと思われる。

(1) Judgment

It appears that plaintiff shipped on board the British Barque "Jeddo" at Nagasaki in October 1869. 4,478 Tubs of coal to the account of the Defendant. To this quantity there is no dispute-but the actual weight of the contents of each Tub is the question to be proven by plaintiff. He has brought forward no evidence whatever to shew [show] that the total weight of these 4,478 Tubs was $560,869\frac{1}{2}$ Cattes the quantity he alleges to have shipped in the "Jeddo". The receipts given by the Mate were for Tubs only. The plaintiff states that he weighed 8 of the Tubs containing the Coal-which is equal to one in 500-and

then struck an average in estimating the whole quantities of Cattles supplied. This is a very vague and uncertain way of arriving at the true quantity delivered and plaintiff showed much neglect in not having been careful to have had the exact weight in Cattles stated on the receipts given to him each day the coals were supplied, no mistake could then have possibly occurred.

The Defendant shows by Declarations of the Captain and Chief Officer of the "Jeddo" made before H. M. M's Consul at Yokohama that the total quantity of Coal shipped at Nagasaki was 269 Tons or 451,920 Cattles-that all the coal so shipped was discharged at Hakodadi and there sold-as per account of sale handed into court stating 269 Tons as the quantity sold.

The Finding of the court is that the plaintiff has failed to substantiate his claim to the additional quantity of coal he alleges to have shipped on board the "Jeddo". Judgment is therefore given for Defendant.

A. A. Annesley

H. B. M's Court

Nagasaki 9 may 1870 H. B. M's Actg Consul

(2) 裁 断 書 写

一 訴主各相手方のため千八百六拾九年第十月中長崎におゐて英国バルク船ゼードー号へ石炭四千四百七拾八桶積入候趣にて右桶数之儀に付而は争論無之候へ共訴主各桶之正味斤数証明可致筈之議論有之候ゼードー号へ積入候桶数四千四百七拾八桶の惣斤数五拾六万八百六拾九斤半に相違無之旨訴主主張候証拠更に無之按針役より相渡候請求書は桶数而已に有之候然ル処石炭入之桶八ツを掛致候処壹樽五百斤宛有之候間右にて積入候石炭惣斤数算當いたし候趣に候得共右ハ確實の斤数を算当致候仕方無之石炭積入候時に相渡候請求書中之斤数確に引合置不申候に付訴主の過と相見へ左も無之候て右様之行違も有之間敷候

一相手方ヘゼード一号船司及び役掛之者之書面を以横浜表不利顯岡士へ申立候は長崎にて積入候石炭惣高メて式百六拾九噸則四拾五万九百貳拾斤にて右積入候分箱館表に而陸揚致売払之斤数式百六拾九噸と相認有之候売捌勘定書之通同所にて売払候由に候

一此事件を勘弁致候に前船ゼード一号へ積入候石炭過上高に付而へ訴主の確証無之候間此裁断は相手方之勝利に有之候

於長崎千八百七拾年第五月九日

四月十二日

英国岡士勤方

エ・エ・エンネスリイ

西 六馬 訳

(3)

Nomura Chikenji, 10th may 1870.

Nagasaki.

British Consulate

Sir.

I beg to inform you that on the 6th Instant a Court was held at this Consulate to investigate into the claims of Kunitaro against Cocking for the term of one hundred and ninety one Rios, being the balance alleged by plaintiff to be due to him for coals supplied to Defendant.

I gave the case a most patient hearing and every opportunity was held out to plaintiff, to substantiate his claim if possible, but he totally failed to do so. Neither by verbal or written evidence could he shew [show] that he supplied to defendant $560,869\frac{1}{2}$ Cattles of coal. The receipts he produced were for 4,478 Tubs only and nothing is mentioned about the weight of the contents of these Tubs and when plaintiff was questioned as to how he arrived at the above quantity of cattles, he stated that he weighed

eight of the Tubs and then struck an average in estimating the whole of the quantity supplied. You will at once perceive that this is a very uncertain method of ascertaining the exact number of cattles supplied. Had one Tub in ten been weighed, as is customary the matter would have been more feasible, or had Kuniaro taken the precaution of inserting the quantity of cattles of coal supplied each day on the receipts he received for the number of Tubs, there could have been no doubt as to the actual quantity delivered.

The Defendant stated that the total quantity of coal shipped on board the Jeddo was 269 tons, or 451,920 cattles. That the vessel went direct to Hakodate, and there discharged and disposed of all the coal on board. He substantiates this statement by Declarations handed into Court, made by the Master and Chief officer of the "Jeddo," before Her Majesty's Consul at Yokohama, and also produced the account of sale for 269 tons of coal sold at Hakodate.

By the enclosed copy of the Judgment you will observe that plaintiff failed to prove his claim and that Judgment has been given for Defendant.

With Compliments

A. A. Annesley

H. M's Consul

(4) 第七拾号

貴国商人国太郎より英商コキンえ売渡候石炭差引勘定之上残金百九拾一兩国太郎事請取度義訴出候一条ニ付本月六日当岡士館ニ而裁判仕候義申進候

扱右之義ニ付委しく聞正し且訴人之証拠相立候様色々仕候へとも全く同人義証拠相立兼候扱売渡候石炭之斤数五拾

六万八百六拾九斤半と申候とも此儀ニ付口上或者書付等之証拠者無之候乍然訴人持居候証拠者唯に四千四百七拾八桶之請取ニ而御座候扱又右ニ申斤数者何が致シ量り候と問正シ候処訴人申候ニ者右之内八桶を目方に掛平均勘定仕右之惣斤数に相成候様申候とも壳渡候惣斤数ニ付而綿密之斤数を相量候ニ者甚不慥なる仕方と足下にも直に御承知有之候乍然通例之仕方のごとく拾桶に一桶宛量り候へ、またしも慥と者奉存候又者国太郎事毎日相贈候石炭之斤数於同人儀請取候桶数ニ差加候事ニ氣於付候たらば相贈候斤数ニ付疑數儀も無之候と存候扱又コキン儀申候者ゼドウ船之積込候右石炭之惣斤数者式百六拾九噸則斤数四拾五万九百九拾斤ニ御座候右船者直ニ箱館へ參り不残之石炭於船上仕壳払候同人此儀ニ付証拠と仕候義者横濱英岡士之前ニ而ゼドウ船之船將兼士官之者之裁判ニ而之申聞猶又箱館ニ而壳候石炭之式百六拾九噸之壳渡勘定於申出候事ニ御座候左候得者国太郎之証拠者相立兼候てコキンえ右勝者被与候段右之裁判之裁断書ニ而御承知有之度候此段申進候
謹言

千八百七拾年

第五月十日

野村知果事 足下

英岡士

エ・エ・エンネスリ

(5)

壹万斤ニ付

式拾四兩式分

此

四千百貳拾斤

代拾兩永九拾四文

(6) 乍恐奉敷願口上書

一 石炭五拾六万八百六拾九斤半

但芘万斤ニ付金貳拾四兩貳分替

惣代金千三百七拾四兩貳朱ト

永五分式厘七毛

右願人国太郎奉申上候先月奉願外国人売込商売被仰付候ニ当九月三日大浦居留地下り松拾芘番内コキンの部屋付を以右石炭凡五拾万斤取極約定仕当四日より八日迄英九拾八番船え積掛り候へ、金四百兩ハ相渡可申旨ニ而惣高積入候上斤数改之上惣代金之半高相渡可申残半金之儀者日数三拾日之延売之約定書、双方取置漸積込仕舞致候ニ付別紙勘定書之通請取り罷越候処八日迄数度参り候得共積込候本船ハ今十日之朝出帆いたし候趣伝承仕候ニ付早速コキン部屋付一同え面談致候処本船は出帆いたし候ニ付金子之儀如何致異候哉相尋候処勘定書持参仕候て相渡可申段申聞候ニ付右書持行候途中ニ而コキン並部屋付一同横浜表迄罷越候趣承り候ニ付相驚直ニ罷越部屋付仮宅小曾根町え罷越同人茂乗船可致之処留置右等之始末相尋候得はコキンは乗船致し候趣申聞候ニ付 御役所え其段御願申上其末部屋付召連罷出奉願上候全部屋付申談之上積込致候所存と奉存候右様之儀ニ御座候て迎而茂相對ニ而者埒明不申小身之私反的潰に及候外無御座候荒々前件之始末御上之御威光を以御吟味被為仰付被成下代金無滞相渡具候様被為仰付被下候へ、荷主え勘定相立難渋相凌商売取続御恩沢之程重疊難有仕合奉存候此段乍恐以書付偏ニ奉敷願候

己九月十日

浦上村淵

西泊郷

国太郎 印

外国官事

御役所

前書之通奉願候ニ付奥印仕候以上

明治初年長崎の居留地外国商人と邦商との取引関係 (一)

三

これはアメリカ商人ウイルキンスから、長崎商人城野嘉三太と田中屋勝右衛門の二名に対する立替金及び共同事業の出資金の返済請求事件である。この事件は次の二つのケースを含んでいる。

(第一) 材木買取に関する件

左掲の「乍憚奉御請口上書」⁽¹⁾に見られる通り、丙寅年（慶応二年）十二月初旬頃前記の田中屋が対州御用材木の売捌方を薩州藩の高見彌市から依頼された。そこで田中屋と城野と相談し、城野がかねて懇意にしているカール・ニツコル（国籍不明なるもおそらく米国人であろう）なる外国商人に材木の買取方を頼んだわけである。ニツコルは「正金にて買取儀難出来」ため、彼が所有している帆船と交易しようと申出た。その旨を高見彌市に相談したところその交易を承諾した。売買の対象である材木は「尺角以下五寸角迄（式間物であろう）之材木七千挺」ということで仮契約ができた。そこで取引の見本となるべき材木を廻送するために、「対州御領唐津浜崎」まで兩人が行かねばならなくなつたが、兩人共「小身」のため旅費其他の工面ができかねたので、ニツコルに相談したところ判金式拾四枚を貸してくれた。⁽²⁾しかし小判では支払に不便なので、それを引当に金を八拾兩借用し、翌亥卯（慶応三年）一月中旬頃、二人が唐津迄行き、材木五百挺（杉角材・式間物）⁽³⁾を長崎まで廻送し、「ニツコル支配地面え水揚」した。ニツコルがそれを見分した結果、材木の寸法が少々相違しているとのことで、契約高七千挺の倍増若万四千挺を要求した。しかしかかる莫大な挺数には応じ得ないので、高見彌市と共に再三交渉したが、話がまとまらず、結局破談となつた。

ニツコルの方では廻送費用を支弁するために右の材木を差押えて了つた。そのために判金式拾四枚を返済する手段がなくなつた。従つて兩人はそのまゝに打過ぎて居つたが、ニツコルの方からは判金の返済方を催促して来る。ニツ

コルが差押えて、売払つた右の材木代金を渡してくれるならば、判金の返済に応ずるから「当方材木代相渡具候様乍恐御上之御慈悲ヲ以」よろしく御願いたしますと兩人は公事方御役場宛の「乍憚奉御請口上書」(明治元年辰三月附)中に述べている。

(第二) 香焼村炭鉞出資に関する件

右の木材取引に関する事件は未解決のままであつたが、更に玄卯(慶応三年)四月以降、右の兩人がニツコルと一種の組合の形式で炭鉞業を開始した。従来、城野・田中屋の兩人は肥前領香焼村で炭鉞業を営んでいたが、資金不足で経営の経続が困難であつた。そこで「先達中材木交易商ひ其儘に相成候訳ヲ以何卒宜しき商方茂有之候は、今一応ニツコルえ取組致度望」を以て、ニツコルに相談したところ出資方を承諾してくれた。採掘した石炭の売捌はニツコルが引受け、「損益共双方配分の約定」であつた。

ニツコルが出資した洋銀三百五拾枚を「仕入金として請取」て兩人は香焼島に渡海した。堀子等数拾人を雇つて採掘したが、思う様な出炭もなく、日々莫大な出費がかさみ、右の金子は使果し、兩人で他から金を借入れて仕事を継続する状態であつた。四月一日から六月十五日まで支出した諸費用の合計は五六七兩余に上つている。(7)加うるに梅雨期に入り「殊之外霖雨相続鉞内所々相損し水鉞と相成」不得止事業を暫く休止した。資金不足で難波の折柄、城野嘉三太が重病にかかり、「終ニ頃日言語も不通程之大病」となつたために、田中屋一人の力に及ばず、そのまゝ放任している状態である。兩人の方で出金した高は三百兩余にも上り、最早他借も出来兼ね次第で、ニツコルとの約定の通、損失を央、負担してくれるように、「御上の御憐愍を以て」ニツコルに納得さして欲しいと兩人は前記口上書の中に申立てている。

明治元年辰三月附で兩人が公事方御役場に提出した前記「乍憚奉御請口上書」の中に記してあるように城野嘉三太は事業失敗と重なる負債のための心痛によるものか重病となり、同年九月十四日に病死している。この事については九月十六日附で、その娘宇多から公事方御調所宛に死亡の届書(6)が提出されている。

嘉三太死亡後、同年十月、田中屋勝右衛門から公事方御役場宛の「奉願口上書」(6)では、判金式拾四枚について

は、廻送した材木を売払つた代金で返済するつもりであつたが、材木を全部差押えられたので返済出来ないから、帳消にしてくれるよう取計つて欲しい旨の嘆願がなされて居り、又洋銀三百五拾枚については「式ヶ年ニ割合老季四拾三枚七合五勺ツゝ御役場迄上納仕度」旨を述べている。

しかしこの事件は容易に結着がつかなかつたのであつて、翌々年明治三年午七月附で、嘉三太の弟、彌平太から公事方御役場宛に出された「乍恐御沙汰ニ付奉申上口上書」（掲載略す）中では、依然として右の金額が未納になつて居り「御上の御憐愍を乞う」旨が記されている。

原告はウイルキンスとなつてゐるが、彼とカール・ニツコルとの関係は史料によつて知るを得ない。おそらくニツコルの代理人であらう。

(1) 乍憚奉御請口上書

一去々寅年十二月初旬頃対州御用材木売捌方薩州藩中高見彌市殿より被相頼候処嘉三太儀兼而ニツコルえ懇意仕候訳ヲ以嘉三太より同人迄申入候処正金に而買取之儀難出来自分所持の風帆船と交易可致趣ニ付其後高見彌市殿迄相尋候処交易之議も可然旨被申聞則尺角以下五寸角迄の材木七千挺ニ而仮約定相成其末手本材木為積廻方対州御領唐津浜崎迄可罷越処小身の私共故難用金等手当出来兼無抛ニツコル迄相談仕候処則判金式拾四枚相渡具候得共判金ニ而ハ遣私不勝手ニ有之右小判引当として金子八拾兩借用致去卯正月中旬頃私共兩人唐津表迄罷越材木五百式拾挺積廻二月初旬頃廻着仕ニツコル支配地面え水揚げたし見分為致候処材木寸法少々相違致居候趣ニ而約定高七千挺倍増壱万四千挺相渡候様申聞候得共元来左様莫太之挺数も無御座品ニ付高見同道ニ而再応談判仕候得共一円相縮不申双方及破談候処対談中舟中為難用右材木不残被押取候故判金返済之手立無御座不得止事其儘打過候儀に御座候実々双方納得之上破談におよひ候儀に御座候得は対談中難用此方ニ而相弁候義無御座哉に相考申候且当節判金代催促願差出候ニ附而は当方材木代相渡具候様乍恐御上之御慈悲ヲ以御理解被仰聞被下候得は難有仕合奉存上候此段荒増奉申上候以上

(2) 一去卯年四月初旬頃肥前領香焼村石炭仕入方仕居候処元手金薄く取続兼居候折柄嘉三太より申聞候には先達中材木交易商ひ共儘に相成居候訳ヲ以何卒宜しき商方茂有之候は、今一応ニツコルえ取組致度由ニ付幸石炭仕入方相談ニおよひ候処程能承知いたし則山方諸雜費附立勘定之上代金相定当地売捌之義ハニツコルより支配いたし損益共双方配分之約定にて 則銀錢三百五拾枚仕入金として請取之私共兩人香焼に渡海いたし山方支配仕堀子等數拾人雇ひ入り日々相働候得共思數出炭茂無御座日々莫太之雜費ニ而終に右金子遣い切候ニ付私共於手元他借仕取続居候中梅雨ニ押移り殊之外霖雨打続鉢内所々相損し水鉢と相成不任心底暫相見合居候中猶仕入金等差支甚難渋之折柄嘉三太儀病氣相煩ひ候故延々ニ相成終ニ頃日言語も不通程之大病と罷成何分勝右衛門老人之不及力ニ打過候義ニ御座候都而私共より出金之高三百兩余ニ茂相嵩小身之私共最早他借も出来兼十方暮罷在申候附而はニツコルえ茂甚氣毒之儀ニ御座候得共約定之通損失半高相弁具候様是又

御上之御憐愍ヲ以納得仕候様御理解被為仰付被下置候は難有仕合奉存候此段奉申上候以上

慶応四年

辰三月

中紺屋町

城野嘉三太 ㊤

外浦町

田中屋勝右衛門 ㊤

公事方

御役場

(3) 覚

一 杉角 五百式拾挺

但 五寸角式間物岩屑にして

惣屑數

明治初年長崎の居留地外國商人と邦商との取引關係 (一)

千〇四拾七肩五合

毫肩に付毫分式朱替

代金三百九拾式両八合毫夕

式才五

外に 金百両也

唐津より長崎迄運賃

同七拾六両

毫分毫朱

唐津往返並に材木積卸諸雜費

五百六拾九両〇式朱也

(4)

一 判金式拾四枚

毫枚に付四両式分替

此金百八両也

右者槌に請取借用仕申候

歸郷之上無之相違返済可仕候

為念如斯御座以上

卯正月十二日

カゝレニツコル様

(5)

奉願口上書

城野嘉三太
田中勝右衛門

印 印

一判金 式拾四枚 但八拾兩に歩入仕入材木取寄雜用之内ニ相成ル

右之桁材木廻着之上少々売払代金ヲ以返済可仕積之处右材木不殘被押取不得止事不納仕候儀に御座候間此桁消縁致具候様乍恐御上之御慈悲ヲ以御理解被仰付被為下度奉願上候

一洋銀 三百五拾枚 但石炭仕入金として請取

此式人割

百七拾五枚宛 老人者喜三太方

右式ケ年ニ割合老季四拾三枚七合五勺ツ、御役場迄上納仕度奉存候間是又御理解被仰付被為下度奉願上候

右之桁々 御上之御苦勞不顧奉願候段甚恐多儀ニ御座候得共兼而奉申上候通莫太之損失仕候末々困窮差廻無拋奉願上候儀ニ御座候間何卒宜しく御聞届被成下度奉願上候以上

辰十月

田中屋勝右衛門

印

上

(6) 乍恐以書付奉申上候

一 私父嘉三太儀是迄長病相煩申候処一昨日病死仕候間此段御届申上候

辰九月十六日

城野嘉三太娘

宇多

印

公事方

御調所

前書之通届出申候間奥印仕差上申候

明治初年長崎の居留地外国商人と邦商との取引關係 (一)

石炭山入費覺

(7) 卯四月朔日

一金七拾兩也

諸色買入として塚原清三郎え相渡ス

同 十日

一同式拾兩也

右同断

五月 朔日

一同拾八兩也

右同断追々相渡メ高

同 四日

一同拾四兩三分毫朱

米酒其外諸色代

一同拾兩

深堀怒平より塚原借用諸色代払

同

一同拾兩也

棟梁又五郎江立替金メ高

同

一同五兩也

勘場小遣として城野持参致ス

同 五日

一同拾兩式分

同所諸道具毫式

同

一同拾兩三分

唐米五百斤式兩三分かえ

同 七日

一同四兩式分

諸色毫式

同 八日

一同八兩式分

為用意金城野持參致ス勘場ニ而遣ひ払

同

一同四兩也

油毫挺代

同 九日

一同六兩三分式朱

諸色拵々

同

一同拾式兩也

鑑木代

同

一同式拾兩也

堀子借金メ高

同 十二日

一同式拾兩也

諸色拵々

同 十五日

一同百兩也

山代金之内香焼幸太郎迄相納

同

一同四拾兩也

右同断深堀怒平迄相納

同

一同拾兩也

諸色代として城野持參致ス

同

一同毫兩也 大工代手附金として塚原迄相渡ス

同

一同拾九兩也 通ひ舟毫艘代幸太郎迄相納

同 十六日

一同五兩也 勘場小遣立置

同 十九日

一同五兩毫分式朱ト 唐米百八拾斤 三兩かへ

同 廿日

一同式兩毫分 日本米式斗

同 廿六日

一同七兩三分ト 唐米式百八拾斤

○四百文

同

一同拾毫兩也 堀子借金並に勘場小遣ひ

同 廿六日

一同三兩三分毫朱ト 諸色掛桁々城野求メ參ル

○四百文

同

一同八兩三朱 鍛治屋其外払方

六月 二日

一同式兩毫分毫朱 諸色桁々

○式百文

同

一同五兩也

用意金として幾次迄為持遣ス勘場ニ而遣ひ払

同

一同七兩ト

唐米式百五拾斤

○三百文

同

四日

一同式兩ト

諸色裕々

○式百文

同

一同拾七兩壹分式朱

城野同道勘場迄持參鑑木其外払方ニ相成ル

同

一同式兩也

道具直し賃塚原迄相渡ス

同

五日

一同壹兩也

深堀行小遣ひ舟賃として同断

同

六日

一同拾兩也

鑑木代

同

一同三兩也

鑑口御地子銀

同

一同五兩也

堀子式人雇ひ入借金

同

一同七兩毫分ト

堀子日役過上銀力松迄相渡ス

○三百文

同

八日

一同四兩三分ト

諸色桁々

○式百文

一同九兩毫分三朱ト

唐白米三百拾五斤

○式百文

同

十一日

一同七兩也

鑑木代為手附覺次郎迄相渡ス

同

一同三兩也

又次郎払

同

十五日

一同四兩式分

勘場小遣立置

一同拾兩也

道造り並ニ石炭下シ賃追々入用凡々高

メ五百六拾七兩式分三朱ト

○式貫四百五文

同

十日

右之通香焼山方諸雜費ニ御座候其外少々宛之入費茂有之候得とも書載不仕候以上

辰

閏四月五日

嘉 三 太

公 事 方

御 役 場

四

これはアメリカ商人ウォールズより長崎商人与平にかかる唐米代金支払請求に関する事件である。

慶応三年卯十二月附で大村町久富屋与平から運上所公事方御掛宛に提出された「乍恐奉願上口上書」(1)によつて事件の概要を次に明かしめる。

与平なる者はかねて深堀領高島で炭鉱を経営していたが、慶応三年六月頃、堀子に支給する糧米が不足したので、アメリカ商人ウォールズから唐米百斤につき式兩替で、拾万斤を六月廿七日に仕入れた。その代金式千兩は同年八月廿日限で支払う約束であつた。右代金の支払について色々工面したが金融の途がつかかなかつた。更に、九月八日から廿日までの間に唐米百斤に付壹兩貳分式朱替で、式拾四万三千斤余を仕入れた。この代金は三千三百四拾兩で、十月廿六日限支払う約束である。前借の式千兩は「売立代金之内」で「皆済払切」たが、三千三百四拾兩の分は「心当之口々悉く間違」つたので、支払につき種々心配していた。然るにウォールズから訴訟に及んだ由であるが恐入る次第である。「昨今猶更丹誠ヲ尽シ金調方心配仕居候得共何分急調無覺束」次第であつて、いすれ仲人を相煩しウォールズと支払につき懇談するつもりであるから、右の内談が整うまで今暫く御猶予を乞う旨を申立てている。

その当時としては巨額の金であるために、アメリカ商人も重大視したらしく、アメリカ領事館にこの事件を持込み、その解決に領事の尽力を願つてゐる。一八六七年十二月末日に合衆国副岡士デイー・エル・モールと長崎鎮台河津伊豆守との間の往復文書(2)(3)によつてこの間の消息を知り得る。

(1)

乍恐奉願上口上書

明治初年長崎の居留地外国商人と邦商との取引關係 (一)

私儀兼而深堀領高島石炭仕入方取掛り罷在候処当卯六月同所堀子糧米手当差支候ニ付重人ウオルス所持之唐米借用之儀仲人を以て相談唐米百斤ニ付金式兩替ニ取極高拾万斤六月廿七日請取之此代金式千兩同八月廿日限借用仕則高島迄差送り申候其末右代金納方色々手当仕候得共手元金操不捌ニ向日限通り納方出来兼候所より又候相談ニ及ひ唐米百斤ニ付金毫兩毫歩式朱替ニ取極高式拾四万三千斤余九月八日より同廿日迄追々ニ請取之此代金三千三百四拾兩同十月廿六日限借用仕売立代金之内を以て前借式千兩は皆済払切申候其後右代金納方心当之口々悉く間違ひ頃日迄種々心配中ニ御座候処此節ウオルス方より御訴訟奉申上候旨甚以奉恐入候御儀ニ御座候隨而昨今猶更丹誠ヲ尽シ金調方心配仕居候得共何分急調無覺束殊ニ一時皆済払切も出来兼候間孰と歟納得致シ候通ニ法立を以て払入之儀仲人相煩内済熟談仕度奉存候依て近頃恐多御願事ニ御座候得共右内談相整候迄今暫く之処何卒格別之御仁慈を以御猶予被為仰付被下度此段乍恐以書付奉願候

卯十二月

大村町

久富屋与平 ㊤

運上所

公事方御掛

前書之通奉申上候ニ付奥印仕候以上

肝煎

山口庄左衛門 ㊤

行事

常四郎 ㊤

(2) 第百三十式号

長崎合衆国岡士館ニ於て

千八百六十七年第十二月三十一日

長崎鎮台

河津伊豆守台下

一別紙日本商人伊万里屋の手形一葉台下ニ差出申候右金三千三百四拾兩ハ日本十月廿六日ウオルス商社ヘ可払入管
ニ付屢同商社より及催足候得共相払不申趣ニ候右速に相捌候様拙者ニ申出候随而急速右皆済いたし候様台下御周旋
被下度相願候 拜具

合衆国副岡士

デイー エル モール

十二月六日

堀 一郎 訳
平井儀十郎 校

㊦ 伊豆守

㊦ 中台信太郎
㊦ 加藤金四郎
㊦ 公事方懸

(3) 千八百六十七年第十二月三十一日書簡落手披閱セリ被申聞候伊万里屋儀は大村町久富屋与平と申者ニ而貴国商人ウオルス商会より唐米買受代金三千三百四拾兩相滞候ニ相違無之旨申立候間右商会に早々済方可致旨嚴敷相達候様
共筋迄取調方相命し置候此段先回答および置候 謹言

慶応三年十二月十二日

河津伊豆守

明治初年長崎の居留地外国商人と邦商との取引関係（二）

合衆国副岡士

デイエルモール

エスクワイル

二八

（未完）

（昭三一・一・九）